

シェイクスピアにみる外来語彙の定着

— abhominable から abominable へ —

三 輪 伸 春

0. はじめに

シェイクスピアの *Love's Labor's Lost* (以下, *L.L.L.*) にアーマードー (Armardo) の発音と語形を非難する銜学者ホロファニーズ (Holofernes) の次のような台詞がある。

Hol. He draweth out the thread of his verbosity finer than the staple of his argument. I abhor such fanatical phantasimes, such insociable and point-device companions; such rackers of orthography, as to speak dout, fine, when he should doubt; det, when he should pronounce debt,—d, e, b, t not d, e, t; (…). This is 'abhominable', which he would call abominable, it insinuateth me of insanie(…)

(*L.L.L.* V. I. 16–25, *The Arden Shakespeare*, Third Series, ed. by H.R.Woudhuysen, 1998)
ホロファニーズ：議論の繊維より、もっと細い言葉の糸を、どんどん繰り出しますからなあ。私は、あんな気違いじみた変物は嫌いだ。あんな、つき合にくい、うるさ型は、あんな、字の綴り方をひん曲げる男はね。あの男は doubt と言うべきなのに、b を落して、dout と言う。debt と言うべきを det と言う。——d, e, b, t なので、d, e, t ではないですよ。こういうのは、実にぞっとする、つまり、abhominable なことですが、それを、あの男は abominable と言おうとする。これでは、こっちが錯乱気味になりますよ。

ホロファニーズはアーマードーの英語を非難して綴りどおりに発音すべきであると主張し、単語を綴り字どおりではなく口語の流行に沿った発音をするアーマードーに嫌悪感を抱いている。しかし、現代英語ではアーマードーの方が正しい。アーマードーの発音とそれに対するホロファニーズの非難は何を意味するのか。ホロファニーズの台詞の末尾にある 'This is abhominable, which he would call abominable,' を取り上げてふたりの英語の違いが何を意味するのかを具体

的に考察する。

クォート版（南雲堂版，1975，以下 Q 版），フォリオ版（以下，F 版。F1 は Norton 版，1968，F2-4 は Brewer 版 1985）では *abominable*，*abominable* (*abominable*) という 2 種類の綴りが交錯して現れる。⁽¹⁾ そこで，Q 版，F 版，語源，使用例，注釈書，古辞書，*OED*² を点検して，*abominable* から *abominable* への変遷をたどり外来語彙定着の 1 例を考察する。

1. シェイクスピアにおける *abominable* と *abominable* (*abominable*)

F1 ではこの語は計 18 回用いられ，すべて *abominable* として現れる。*L.L.L.* のこの場面でも前の語形も後の語形もともに *abominable* とつづられている。しかし，それでは，アーマードーの語形 *abominable* を非難し *abominable* という語形が正しいとするホロファニーズの台詞が首尾一貫しない。そこで，Q 版，F1～F4 にみられるホロファニーズの台詞を点検する。

Q; This is abominable, which he would call abominable,

F1, F2; This is abominable, which he would call abominable;

F3, F4; This is abominable, which he would call abominable: (下線筆者)

前の語形はどの版も *abominable* で統一されている。一方，後ろの語形は，Q 版では *h* がなく，*b* を重ねる語形を用いている。そして F3，F4 では後ろの語形はともに *h* のない *abominable* で前の語形とは違う。ホロファニーズの非難が成立するためには，前の語形は *abominable* であり後ろの語形は *abominable* のはずである。F1，F2 はなぜ同じ語形を用いているのか。英語史上，*abominable* と *abominable* とはどのような関係にあるのか，シェイクスピアの時代における両語の関係はどうなっていたのか，現代英語の標準的語形 *abominable* はどのようにして定着したのかを考えてみる。

2. 英語史における abominable と abominable

まず、*OED*²の記述を参照してみる。すると abominable の語源欄に、*L.L.L.* のこの箇所に関する言及がある。

abominable (….) Also 4-7 abhominable. [a. Fr. *abominable*, *abhominable* ad. L. *abō minābil-is* deserving imprecation or abhorrence; f. *abōminā-ri* to deprecate as an ill omen; f. *ab* off, away + *ōmen*; cf. the exclamation '*ab-sīt ōmen!*' In med. L. and OFr., and in Eng. from Wyclif to 17th c., regularly spelt *abhominable*, and explained as *ab homine*, quasi 'away from man, inhuman, beastly,' a derivation which influenced the use and has permanently affected the meaning of the word. No other spelling occurs in the first folio of Shaks., which has the word 18 times; and in *L.L.L.v.i.27*, Holophernes abhors the 'rackers of orthogriphie' who were beginning to write *abominable* for the time-honoured *abhominable*.] (*OED*², abominable)

第1に、abominable はフランス語からの借用語で、語源は、ab 'off' + omine 'omen' + -able である。ところが、すでに中世ラテン語の時代に、語源が ab + homine 'human' (+ -able) と誤解されていた⁽²⁾。この誤った語源解釈に基づく語形 (abhominable) が14世紀に英語にもたらされ17世紀まで一般的に用いられた。第2に、この誤った語源解釈が英語史におけるその後の abominable の意味変化に影響を与えた【つまり、「嫌悪すべき」に「非人間的な」という意味合いが加えられた】。第3に、シェイクスピアのF1ではすべて abhominable という語形で用いられている。第4に、*L.L.L.* で、ホロファニーズは伝統的に認められていた abhominable ではなく、abominable という「正書法を捻じ曲げた語形」を使うアーマードーを非難している。

doubt, debt についても、伝統的つづり字を優先し現実に用いられている発音・綴りを認めようとするホロファニーズの見解に基づく台詞からすると、シェイクスピアは abhominable とは別に abominable という語形があることを知っていたことになる。そのように解釈するとホロファニーズの台詞が意味を持つように思われる。F1 と F2 の編者はそのことに気づいていなかった可能性がある。

h の有無は微妙な問題なので、以下にあげる信頼できるテキストとコンコーダ

スに基づき英語史における abominable と abhominable の使用状況を調べた。⁽³⁾

Chaucer(A), *A Glossarial Concordance to the Riverside Chaucer* (ed. L. D. Benson, 1993, Garland)

Chaucer(B), *A New Concordance to The Canterbury Tales based on Blake's Text ed. from the Hengwrt Manuscript* (ed. N.F. Blake, et al., 1994, Univ. Education Press)

Caxton, *A Concordance to Caxton's Own Prose* (ed. K. Mizobata, 1990, Shouhakusha)

Lyly, *A Complete Concordance to the Novels of John Lyly* (ed. H. Mittermann & H. Schendl, 1986, Olms)

Spenser, *A Comprehensive Concordance to the Faerie Queene*, ed. H. Yamashita, 1990, Kenyusha)

A.V., *The Exhaustive Concordance of the Bible*, by J. Strong, 1890, 1976, Abingdon

Milton, *A Concordance of Paradise Lost* (ed. C. Florén, 1992, G. Olms)

Congreve, *A Concordance to the Plays of W. Congreve* (ed. D. Mann, 1973, Cornell Univ.)

結果は下の表ようになった。

	Chaucer (A)	Chaucer (B)	Caxton	Lyly (1578)	Spenser (1590)	A.V. (1611)	Milton (1667)	Congreve (1694-1700)
abhominable	9	10	1	1	1(-ly)	0	0	0
abominable	0	0	0	0	0	23	2	1(-ly)

16世紀まではもっぱら abhominable が用いられているのに反し、17世紀以降は abominable のみが用いられていることがわかる。

これらのコンコーダンスでは例が少ないので、*OED*²の CD-ROM (version 3.0, 2002) を用いて *OED*² のすべての引用例で確認した。

	14 C	15 C	16 C	17 C 前半	17 C 後半	18 C	19 C	20 C
abominable	4	7	66	17	3	0	0	0
abominable	2	0	12	15	20	25	73	41

この表からも明らかなように17世紀中に逆転している。なお、*OED*² の CD-ROM では14世紀には *abominable* と *abominable* それぞれ5例、3例であるが、Wyclifからの同じ文を別の見出し語中に引用しているので差し引き4例、2例である。

*OED*² の Wyclif からの引用文は興味深い。

1382 WYCLIF I 57 Kyng Antiochus beeldide the abominable [1388 *abominable*] ydol of desolacioun.

古典ラテン語に極めて忠実な訳である初期訳版(1382年)と、英語らしい訳文を意図している改訳版(1388年)の英語の違いが *abominable* と *abominable* という語形の違いに反映されていることを *OED*² の引用文は示唆している。

3. 注釈にみる *abominable* と *abominable*

ファーネス (H.H.Furness) は以下のような注釈を与えている。

26. **abominable**] ELLIS (p.220) : *abominable* was a common orthography in the XVth century, and the *h* seems to have been occasionally pronounced or not pronounced, as the Pedant in *Love's Lab. L.* says. It is usual to print the second 'abominable' without the *h* and the first with it, but it seems more proper to reverse this, and write 'this is is abominable, which he would call abominable,' for the Pedant ought certainly to have known that there was no *h* in the Latin, although in the Latin of that time *h* was used, as we see from the *Promptorium*, 1450, '*Abominable* abominabilis, *abominacyon* abominacio,' and Levins, 1570, '*abominare*, abominari,' as if the words referred to *ab-homine* instead of *ab-omine*. (H.H.Furness, *A New Variorum Edition of Sh., L.L.L.*, p.211, 1904, rpt. 1964)

ファーネスは、エリス (A. J. Ellis, *On Early Eng.Pron.* 1869-89) を援用して16世紀には *abominable* が一般的であったこと、またホロファニーズの台詞の場合「前の語形は *h* をつけ、後の語形では *h* をつけないで印刷するのが普通

である。しかし、むしろ、前後の語形を逆にして、‘this is abominable, which he would call abhominable,’とした方がいい。というのは、学識のあるホロファニーズは古典ラテン語ではhのない語形しかないことを知っていたに違いないから。』という。しかし、逆に、前の語形を abhominable, 後ろの語形を abominable としてはじめて銜学者ホロファニーズの台詞が意味をなす。

この箇所に関する Arden 版の注釈は、H.R. Woudhuysen 編集の Third Series (1998) より R. David 編集の旧版の方が語彙研究には有用である。

アーデン版は以下のようになっている。

23. *abhominable*] a common spelling of the time and, earlier, arising from a mistaken etymology, *ab homine* instead of *ab omine*. It is found in early dictionaries; *Promptorium*, 1450, and Levin’s *Manipulus*, 1570. Minshew (ed. 1627) had it. ‘Abominable, *vide abhominable*”, Cotgrave has it right in 1611, but Sherwood (1672) sets Cotgrave straight with the insertion of the *h* he omitted. Nashe, Harvey, Greene, and all writers of the time, as well as every use in the Shakespeare Folio (1st and 2nd) have the *h*, I believe. Indeed, if we accept the Q₁’s ‘abhominable’ it is apparently the earliest example of the omission of the aspirate intentionally. The two *bs* in the Q conform with the Italian of John Florio’s dictionary, *New World of Words*. (R. David, ed., *The Arden Shakespeare*, L. L. L., p.114)

15世紀から17世紀の辞書、それに当時の作家たちには *abhominable* が一般的であったこと、Q の b を重ねた綴りはフロリオの『イタリア語—英語辞書』にもみられる語形であり (J. Florio, *World of Words*, 1598, *abhominare*, Scholar Press Facsimile, p.3), 当時実際に用いられていたことが記されている。が、この注釈で最も重要なことは、シェイクスピアの時代を境として、語源的に正しい語形である *abominable* が広く行われるようになったこと、Q の *abominable* は、シェイクスピアが誰よりも先に h のない語形を「意図的に」用いたという指摘である。

15世紀から17世紀の辞書、それに当時の作家たちには *abhominable* が一般的であった。Q 版の b を重ねた綴りはフロリオの『イタリア語—英語辞書』にもみられる語形であり 【J. Florio, *World of Words*, 1598, *abhominare*, Scholar Press Facsimile ed., p.3】、当時実際に用いられていた。シェイクスピアの時代を境として、語源的に正しい語形である *abominable* が広く行われるようになった。

た。Q版の *abominable* は一般大衆の口語ではすでに用いられていた。シェイクスピアは従前の語形 *abhominable* が新しい語形 *abominable* に取って代わられつつあることを感じ取っていたのである。シェイクスピアが、*abominable* の方が語源的に正しいということを知っていた可能性もなくはないが、いかに博識のシェイクスピアでも、語源としては *abhominable* は間違いで、*abominable* の方が正しいと認識した上で *abominable* を普及させようとしていたと考えることには無理がある。それよりも確実に重要なことは、保守的な学者達が伝統的な語形にこだわり *abhominable* を正しいとする時代にあつて、一般民衆の口語では *abominable* の方が好まれるようになっていたこと、そして結局次の時代には *abominable* の方が優勢になることをシェイクスピアは感じ取っていたということである。ホロファニーズの台詞からすると、シェイクスピアは特定の人物、特定の単語を揶揄していたというより、ホロファニーズのように伝統的な語形にこだわる学者者たちとともに巷間はやりの新語 (neologism) を得意げに使うアーマードーのような軽はずみな人々の両方を揶揄していると考えられる。⁴⁾ いずれにしても、次の時代の英語のあるべき姿を敏感に把握していた。ふたつの表が Arden 版の注釈の妥当性を証明している。

4. 古辞書にみる *abhominable* と *abominable*

Arden 版ほかの注釈には、各種の古辞書が言及されているので、辞書における *abhominable*, *abominable* の記述をたどることにより、*abominable* 確立の様子を点検する。Variorum 版 (H.H. Furness, *A New Variorum Edition of Sh., L.L.L.*, p.211, 1904, rpt.1964) で言及されているのは、*Promptorium Parvulorum* (1440), Levins (*Manipulus Vocabulorum: A Rhyming Dictionary of the English Language*, 1570) であり、いずれも *abhomin-* 形である (*Prompt. Parv.*, EETS. Extra Series, 102, *abhominable*, *abhominacion*, p.3; *Mani.Vovr.*, EETS, D.S. 27 to *Abhominare*, p. 42)。Arden 版には、Cotgrave の初版 (*A Dictionarie of the Fr. & Eng. Tongues, abominable*, 1611, rpt. Scolar Facsimile ed.) では古典ラテン語形 *abomin-* である

が再版 (Sherwood, ed., 1672) では当時の英語の慣例に従って中世ラテン語形 *abhomin-* に変更されていることが記されている。*The Dictionary of syr Thomas Eliot knyght* (1538, rpt. Scolar マイクロフィッシュ版) では, *Abominor*(p. I) がある。これらの辞書にみられるふたつの語形は明確に区別することができる。すなわち, 古典ラテン語を扱った辞書では *abomin-* 形 であり、中世ラテン語を扱った辞書では, 通俗語源による *abhomin-* 形 である。英語には当初中世ラテン語の語形が借用され16世紀まで広く用いられたが, 17世紀以降, 最初は口語に用いられ, 後に *L.L.L. V.1.25* (Q 版) そのほかの作品に見られるようになる古典ラテン語の正しい語源に基づく語形が復活する。それ以降17世紀の英語辞書はすべて古典ラテン語形 *abomin-* 形 を採用している。例えば, J. Kersey, *A New Eng. Dictionary*, 1702, rpt. Scolar Fac. ed., S. Johnson, *A Dictionary of the Eng. Lang.*, 1755, rpt. Longman Fac. ed., 1990。

結び

abominable から *abominable* への転換 (再借用) は多数の外来語借用の歴史の中に生じた現象のひとつといえよう。中世ラテン語期に通俗語源により *abhomin-* という語形が生じ, 英語でも16世紀までは広く用いられた。16世紀頃までは, 正しい語形 *abominable* を用いることは避けられた。⁽⁵⁾ が, 16世紀末に古典ラテン語に基づく正しい語形が再借用され *L.L.L.* の Q 版が *abominable* の定着に貢献している。

一般民衆の口語に生じた通俗語源 (例. *crayfish*<F *écre visse*, *screwomatics*<*rheumatics*, *female*<F *femelle*)⁽⁶⁾ とは別に学識語にも誤解によって生じた例がある。形容詞 *ingenious* (巧妙な) と *ingenuous* (率直な) は学識者でも混用する場合があった。その結果, 17世紀に *ingenuous* に対応する名詞 *ingenuity* が *ingenious* に対応する名詞 *ingeniousness*, *ingeniosity* に取って代わった。*emergency* は *urgency* の影響で「表面に現れてくるもの」という語源の意味から誤って推測されて「突発事態」という意味を獲得した。*transpire* は「(事件などが)

起こる」という意味で用いられることがあるが語源的意味は「(秘密などが)洩れる」である。また、preposterous は本来語源に基づく「順序が前後逆の」という意味であったがそこから「不自然な、とてつもない」という意味が派生し広く普及した。⁽⁷⁾ 通俗語源で生じた語形が、意味は通俗語源の影響を受けたままで、本来の正しい語形に訂正されて定着した abominable は珍しい例である。

シェイクスピアは、発音、文法の面でも、語彙・意味の面でも英語の変化を敏感に感じ取り、当時、英語が伝統的な英語から新しい英語として大きく変容しつつあることに大きな注意を払い新しい英語の発展と確立に大きな貢献をしている。⁽⁸⁾ シェイクスピアは、このことを明確に認識していたと考えられる。ホロファニーズの主張する古い英語と対比させながら意図的に新しい時代の英語を取り入れているのはその 1 例といえよう。英語における abominable という語形の確立・定着という現象にその具体的な例を見ることができる。このような意味でホロファニーズの台詞の解釈が重要な意味を持つのである。

注

- (1) abominable と abominable との書記法上の違い (-b-, -bb-) に関する問題は本稿では扱わない。
- (2) 通俗語源 (folk etymology) の例。中世ラテン語以降に生じた語形なので古典ラテン語の辞書、Lewis & Short, *A Latin-English Dictionary* (1879) には Abominor があるが、abhomin- 系の見出しがない。
- (3) Chaucer(B) に 1 例多いのは Person's Tale Fragment X の 910 行。ちなみに Chaucer(A) では、abhominable が 1 例 (Pardner's T. Frag. VI), 9 例が abhomynable である。Chaucer(B) ではすべて abhomynable。
- (4) Mugglestone, L.(ed.) *The Oxford History of English* (2006), Oxford, p.226.
- (5) H. Bradley, *The Making of English*, 寺澤芳雄訳『英語発達小史』, p.217.
- (6) Davis, C. S. & Levitt, *What's in a Name?*, RKP, 1970, pp.82-3.
- (7) *OED*², H. Bradley, 同上書, pp.216-7.
- (8) 三輪伸春『シェイクスピアの文法と語彙』松柏社, pp.1-2, 57, 150, 他。
(本稿は『英語青年』2007年11月号所載の拙論の完全版である)